

モーツァルト：ディヴェルティメント第17番 二長調 K334

「ディヴェルティメント」とは、「娯楽」という意味のイタリア語に由来し、芸術的な高みを目指した音楽というよりも、聴衆と演奏者のための愉しみのために書かれた音楽が多い。とりわけオーストリアや南ドイツには豊かな伝統があり、ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756～1791）も多くのディヴェルティメントを書き残した。

ディヴェルティメントには典型的な編成はなく、モーツァルトもさまざまな楽器の組み合わせで作曲した。この曲はホルン2、ヴァイオリン2、ヴィオラ、「バス」（チェロ、場合によってはコントラバスやファゴットも用いられた）という編成である。ただし、第2楽章の第2変奏、第3楽章のトリオ部、そして第4楽章ではホルンは使われない。こうして、「フル・オーケストラ」ほどの多彩な楽器の組み合わせではないものの、響きに変化が加わるようさまざまな工夫が凝らされている。

作曲されたのは1779～80年頃。有名なマンハイム・パリ旅行など各地で見聞を広めた若きモーツァルトは、当時故郷ザルツブルクに戻っていた。やがて転居したウィーンで1782年5月8日に、モーツァルトは父に宛てて次のように書いている。「ロビニヒの音楽が好きだと前に書いておられたでしょう。あれは誰が所持していますか。僕は持っていません」——作曲者のこの言葉から、ザルツブルクの名門貴族であるロビニヒ家の、モーツァルトが「ジーゲル」と呼んでいたジークムント・ロビニヒのために書かれたと推測されている。おそらくザルツブルク大学の法科の最終試験に通ったロビニヒへのお祝いだったのだろう（モーツァルトはしばしば、友人・知人の祝賀のためにディヴェルティメントを書いた）。

この作品には6つの楽章がある。第1楽章はヴィルトゥオーソ風の第1ヴァイオリンによる付点リズムの主題と、第2ヴァイオリンによる柔らかな主題との対比で進んでゆく。第2楽章は同主調の二短調に転じた変奏楽章。表情豊かなアンダンテの主題に6つの変奏が続く。第3楽章と第5楽章はメヌエットで、その間にイ長調でのアダージョ楽章がはさまれる。そして最後は快活な8分の6拍子のロンド楽章で締めくくられる。

ストラヴィンスキー：

室内オーケストラのための協奏曲 変ホ長調「ダンバートン・オークス」

ロシア生まれのイーゴリ・ストラヴィンスキー（1882～1971）は、のちにフランスやアメリカで活躍した作曲家である。アメリカへの移住を決意する数年前、1936年に彼はヨーロッパとアメリカで大規模な演奏旅行を行った。その際にワシントンで、この作品が生まれるきっかけとなるできごとがあった。プリス夫妻から結婚30周年記念の新作を委嘱されたのである。生涯にわたって芸術のパトロンであったプリス夫妻は、「現代音楽」を促進すべく同時代の作曲家たちに作品を委嘱した（ストラヴィンスキーの《ハ調の交響曲》もそのひとつ）。曲のタイトルにある「ダンバートン・オークス」とは、このパトロンのワシントン郊外にある邸宅の地名である。こうしてストラヴィンスキーは1937年の夏に作曲を始め、1938年3月末までにこの曲を完成させた。初演は1938年5月8日、作曲者の良き理解者であったナディア・ブーランジェの指揮で私的に行われた。

「カメレオン作曲家」と呼ばれたストラヴィンスキーは、20世紀に並存したさまざまなスタイル——原始主義、新古典主義、十二音技法など——で作曲したが、3つの楽章からなるこの協奏曲は、彼の新古典主義時代の作品である。20世紀前半、重厚な後期ロマン派音楽への反発から、古典の形式や精神に回帰しつつ新しい音楽を志向することが大きな運動となっていた。ここでいう協奏曲は、バロック時代に好まれた複数の独奏楽器とトゥッティとの交替からなるコンチェルト・グロッソであり、具体的にはJ. S. バッハの《ブランデンブルク協奏曲》がモデルだと思われる。

この作品はフルート1、クラリネット1、ファゴット1、ホルン2、ヴァイオリン3、ヴィオラ3、チェロ2、コントラバス2、という珍しい編成で書かれている。第1楽章「テンポ・ジスト」はバロック時代に典型的な音型で始まり、フーガ風の書法もバッハの様式を想起させる。第2楽章「アレグレット」では、冒頭のリズムが全体を通して印象的に用いられる。長いフルートのパッセージの後、アタッカで途切れることなく第3楽章「コン・モート」のフィナーレへ。たしかにバロック音楽の要素もあるとはいえ、頻繁に拍子が変わったり、変拍子や鋭い不協和音もふんだんに用いられたりと、ストラヴィンスキーらしい音楽といえよう。

ラヴェル：亡き王女のためのパヴァーヌ

モーリス・ラヴェル（1875～1937）はしばしば「管弦楽の魔術師」と称されるように、オーケストレーションを得意とした。その手腕は、管弦楽の作曲にとどまらず、彼が何度も行ったピアノ曲のオーケストラ用編曲にもよく表れている。編曲の対象はムソルグスキーの《展覧会の絵》のように他人の作品のこともあれば、本日演奏される2曲のように自作の場合もあった。

《亡き王女のためのパヴァーヌ》はまず1899年、ラヴェルがパリ音楽院の作曲科に在学中にピアノ曲として作曲された。そして約10年の時間を経て、1910年に作曲家自身によってオーケストレーションされた。管弦楽版は1911年にイギリスのマンチェスターで初演され、すぐに好評を得て再演が続いた。

もっともラヴェル自身は、この曲に満足していたわけではないようだ。1912年1月にこの曲が演奏された演奏会を聴いた作曲家は、その批評文を『ルヴュー・ミュージカルSIM』誌に寄稿しており、そこにはこれが「ずっと以前の曲」であり「これほど離れると、いまさら良いところがわからない。それどころか、残念なことに、粗が目立つばかりだ。シャブリエの影響がはっきりしすぎているし、形式もかなり貧弱だ」と辛口のコメントがある。

全体は小規模なオーケストラのために編曲され、哀愁漂うこの作品をピアノとは一味違ったテイストで表現する。弦楽器が全体を通して弱音器を付けて演奏するよう指示されていることも、この特徴的な響きを支えているのだろう。

なお、タイトルにある「パヴァーヌ」とは、スペイン起源の宮廷舞曲のこと。ゆっくりとしたテンポの2拍子系の踊りである。スペインとフランスとの国境に生まれたラヴェルは、スペイン風の作品を多く作曲した。「亡き王女のための」について、ラヴェルは「亡くなった王女の葬送の哀歌ではなく、その昔、ベラスケスが描いたような、スペインの宮廷で、王女が踊ったようなパヴァーヌを喚起するもの」と述べている。

ラヴェル：組曲『クーブランの墓』

こちらも同様に、ラヴェルが1914～17年に作曲したピアノのための6曲からなる組曲から、4曲を1919年に作曲家自身がオーケストレーションしたものである。管弦楽版は1920年に初演された。

「クーブラン」と曲名にあるものの、ラヴェルによればフランス・バロックを代表する作曲家フランソワ・クーブラン（1668～1733）への賛辞というよりも、18世紀フランス音楽へのオマージュだという。元となるピアノ曲が作曲されたのは、まさに第一次世界大戦の頃。ラヴェル自身は、入隊を希望したにもかかわらず体格のために戦闘の最前線には向かえなかったが（それでも一時期、軍のトラック運転手を務めた）、彼の友人は多くが徴兵され、犠牲となった者もいた。ピアノ版の各曲は、第一次世界大戦で亡くなったラヴェルの友人一人一人への思い出に捧げられている。

管弦楽版は「前奏曲」、「フォルラーヌ」、「メヌエット」、「リゴードン」から構成される。とくに重要な役割を担っているのがオーボエで、「前奏曲」もオーボエの主旋律で始まる。絶えず動き回るパッセージや装飾音は、ルイ14世の時代に花開いたフランスの鍵盤音楽を彷彿とさせる。「フォルラーヌ」は北イタリア起源の舞曲で、フランス宮廷でも好んで踊られたもの。これは全曲中もっともクーブランと関係する曲である。というのも、ラヴェルはこれを作曲する準備として、クーブランの《王室のコンセル》第4番「フォルラーヌ」を編曲し研究したからである。とりわけ印象的に用いられる付点リズムは、ラヴェルがクーブランからインスピレーションを得たものであろう。けれども、大胆な不協和音の使用は、クーブランの響きとは別世界である。続く「メヌエット」は優雅な佇まいで、中間部に素朴で田舎風のミュゼットがはさまれる。そして最後は（ピアノ版が「トッカータ」で終わるのとは異なり）南フランス起源の舞曲「リゴードン」で華やかに閉じられる。

ラヴェルもストラヴィンスキーも、バロック時代の音楽へのまなざしを含んでいるが、そこから生まれる音楽が大きく異なることは興味深い。